

平成 27 年度研究助成 研究実績報告書

代表研究者	立命館大学大学院応用人間科学研究科 教授 村本 邦子
研究テーマ	家族漫画を中核装置としたアクションリサーチによる「心の防災」理論化の試み

<助成研究の要旨>

研究代表者らは、2011 年、十年にわたって東北 4 県を巡回する「東日本・家族応援プロジェクト」を立ち上げ、活動を続けてきた。これは、家族療法家/漫画家である共同研究者・団士郎による家族漫画を媒介に、東日本大震災の被災地と全国（時には国外）をつなぎ、被災地の人々を励ましながら、結果的に、それ以外の地域の人々にも、来るべき災害への備え、すなわち「心の防災」として機能していることが想定された。本研究では、この副産物とも言える「心の防災」の部分に焦点をあて、アクションリサーチを試みた。

当初の目的は、漫画展開催に合わせたインタビューによって、それを見た人々のなかで何が起きているのかを明らかにすることだったが、合わせて人生における困難を乗り越える知恵についても聴くこととした。質問項目は、①漫画展を見た感想 ②人生の困難を乗り越えてきたコツ ③困難のさなかにある人への助言 の 3 つである。②③の質問は、自身のコーピング・ストラテジーを語ることによって、それを強化するものである。

具体的アクションとしては、①2015 年 6 月 27 日（土）～7 月 5 日（日）京都の京阪電車三条駅構内で「未来のための思い出：ココロ重ねるプロジェクト」開催 ②2015 年 11 月 21 日（土）～22 日（日）台北で行われたアジア災害後心理援助シンポジウムで英語版「未来のための思い出：ココロ重ねるプロジェクト」の開催 ③2015 年 6 月から現在、冊子展と web 展の開催である。①は数千人の眼に触れたと推定されるが、21 名のインタビュアーによって 250 名の声が集められ、質的分析によって、漫画展が見る人にもたらした意味と人生の困難を乗り越えるコーピング・ストラテジーを明らかにした。また②では 24 名、③では葉書 47 名、web20 名の声が集められ参照された。

結果を要約すると、この漫画展を見た者の多くは、そこにいろいろな人生のいろいろな物語を読み取り、自分や身近な人の体験を重ね合わせ、多彩な感情を体験すると同時に、自己を振り返ることを促され、個人誌の語りが誘発されていた。漫画の物語と絵の相乗効果がこのプロセスを支え、それらのプロセス全体を見守る視点の存在がその場の形成を可能にしていた。PTSD に代表されるトラウマ症状の中核にあるのは孤立無援感と圧倒的無力感であるが、ここで、俯瞰的視点を持ち他者と自分を重ねあわせることを通じて、誰もが災難に見舞われる可能性を持つが、人々は歴史を通じてそれを乗り越えてきたし、これからもそうしていこうという観点は、それらに抵抗するものと言える。

こういったプロセスを経て、人生の困難を乗り越えてきた自身の体験を振り返ってもらうと、困難を乗り越える力（レジリエンス）は、①他者に頼りつながりを力にする ②覚悟を決めて自分の人生を引き受ける ③運命をありのままに受け入れる（人生観）から構成されるものとして示された。基本的に、この 3 つは、漫画展によって引き出された個と一般（他者の存在）の往還、俯瞰する視点と重なる。「心の防災」には、他者とつながりつつ自分の人生を引き受ける覚悟、全体を俯瞰する視点が有効である。インタビューに携わった 21 名の大学院生・修了生たちは、インタビューを通じて、他者への敬意と絆、俯瞰する視点の活性化、自己省察を体験しており、インタビューしたことが「心の防災」に役立ったと言い、一部、フィードバックを受けることができたインタビュー協力者も同様の体験を報告した。「心の防災」には、それについて他者と語る機会を設定するが有効であると考えられる。

本研究は家族漫画展を中核に「心の防災」の理論化を試みたものだが、その他の設定可能性についても検討が必要であり、ここで行われたことが、実際、未来の防災に役立ったかどうかについては、今後、研究協力者の長期的フォローアップが求められる。